

実践における概念を研究するとは どのようなことか？

—— エスノメソドロジーから見た『客観性』と『ラボラトリー・ライフ』 ——

前 田 泰 樹*

1. 実践における概念使用の研究

1.1. エスノメソドロジー

本稿を執筆する直接の契機は、2022年7月24日に京都大学人文科学研究所で開催された「実践としての科学的認識——『客観性』『ラボラトリー・ライフ』を読む」という合評会の、評者としての登壇をご依頼いただいたことに始まる。まずは、狭い意味での科学論の研究者ではない筆者をお招きいただき、報告の機会を作っていただいた瀬戸口明久さん、河村賢さんはじめ企画者、登壇者の皆様、そして参加者の皆様に、厚くお礼を申し上げたい。筆者にお声がけいただいたのは、合評会の主題の一つとして、実践における概念の研究の方法が問題になっているからだと思う。実践における概念使用の研究を行うのが、エスノメソドロジー（以下EM）研究であり、筆者の専門は、医療のEM研究になる¹⁾。本稿も、筆者の立場から、L. ダストンとP. ギャリソン（以下D&G）の『客観性』について、そしてごく手短に、B. ラトゥールとS. ウールガー（以下L&W）の『ラボラトリー・ライフ』（Latour & Woolgar 1986=2021）についても、それらをどのように読んだかを示し、書評のかわりとした。

なお、筆者の科学論にかかわる仕事としては、編者として参加した『概念分析の社会学』『概念分析の社会学2』（酒井ほか編 2008, 2016）がある。このプロジェクトでは、科学哲学者I. ハッキングの「人びとを作り上げる」プロジェクトのアイデアも継承しながら、実践における概念の使用を分析するEM研究の方向性を示した。筆者自身は、遺伝性疾患をめぐる新しい概念の研究を行い、それらの仕事は、前田・西村（2018）としてまとめられている。ハッキングには、D&Gの『客観性』を読む補助線として、本稿2節「『眼の認識論』と『歴史的存在

*まえだ ひろき 立教大学 教授

論』」に登場してもらおう。

また、科学論にかかわるもう一つの仕事²⁾としては、M. リンチ『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』（Lynch 1993=2012）の翻訳にかかわった。M. リンチは、（観察、説明、証明、測定、表象といった）認識論にかかわる概念について、「観察する」「説明する」などといった状況づけられた活動がどのようになされているのか、実践において再特定化していく方向性を示した（Lynch 1993: 200-1, 299-308=2012: 236, 344-55）。本稿3節「『訓練された判断』と『見ること』のEM」では、『客観性』において示された図像をとりあげ、それらを「見ること」がどのようになされているのかを再特定化していくことで、コメントとしたい。続く4節では、M. リンチがL&Wに行った批判から出発して、対話の可能性を探ることで、『ラボラトリー・ライフ』およびアクターネットワーク理論（以下ANT）へのコメントを行う。

1.2. 『客観性』の研究の中心としての視覚的实践

先へと進む前に、『客観性』への本稿の立場を簡潔に示しておきたい。まず注目すべきなのは、D&Gが、『客観性』のアプローチの2つの側面として、「膨大な図像において作動している集合的经验主義」と「アトラス制作を支配している統制的理念」をあげていることだ。集合的经验主義に着目するアプローチは、多くのアトラスの広範囲な調査を必要とした。『客観性』の研究の中心は、「多数の分野におけるさまざまな視覚的实践」になる（Daston & Galison 2007: 6=2021: 3-4）。視覚的实践への着目という水準では、D&Gのアプローチと後に検討する「見ること」のEM研究は、多くの共通点を持つと考えられる。

その上で、こうした方針が、特定の実験室の調査と差別化する形で提示されていることにも注意が必要だろう。もちろん、これらの研究が、広範なアトラスの調査を必要とすることは理解できる。個別の事例よりも、客観性があまねくところに遍在する（ubiquitous）ようになったのはいつかに関心がある（Daston & Galison 2007: 29=2021: 22）ということも理解できる。他方で、視覚的实践の研究であるならば、やはり視覚そのものがどのように組織されているのか、という問いを不問にはできないと思う。そしてその問いは、個別事例を通して示されるものでなければならないようにも思う。EM研究者である筆者が問いたいのは、この点である。

そして実際に、D&Gは、非常に多くの個別の図像を提示している。こうした図像は、アトラスを読むという実践において用いられるものである。つまり、こうした図像は、科学教育の場においても、『客観性』を読む読者に対して、「見ることのできる」ものとして提示されている。「見ることのできる」ものである以上、これらの図の作成には、それがまさに「当のもの」だと見えるようになるような「方法」が用いられているはずであるし、実際に読者もその方法を利用することで図像が「当のもの」だと見える（／見えない）のだ、ということを示すことができるはずである。視覚实践の例証ということで述べたいのは、まさにどのように視覚

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

が組織されているのか、その「方法」とその方法のもとでの（正解となる）「見え」の双方を示す作業である³⁾。

『客観性』には、明確に自覚的ではないだろうし、また十全なものでもないだろうが、こうした視覚実践の例証という作業が、少なくとも部分的には含まれている。『客観性』は、実際に図像を見る実践がどのような概念を用いてなされているのかと、その概念が広範に使用されるものであることを同時に示す必要のもとで、それを実際に行った書物なのだと思う。以下、2節、3節でそれを検討する。

2. 「眼の認識論」と「歴史的存在論」

2.1. 「歴史的存在論」から見た『客観性』

2節では、科学哲学者ハッキングから見たダストンらの仕事の位置づけを確認するところから始めたい。ハッキングは、『知の歴史学』（Hacking 2002=2012）の中で、ダストンらの仕事を「歴史的なメタ認識論」と呼んでいる。ハッキングによれば、「認識論で用いられている諸概念を、歴史の流れの中で進化し、変容を遂げる対象として研究することが彼女らの仕事」（Hacking 2002: 9=2012: 20）なのでおり、ここで明示的に「認識論で用いられている諸概念」と述べられていることを確認しておきたい。

その上で、ハッキングは、この意味での「メタ認識論」を、M. フーコーから引き継いだ「歴史的存在論」の中に位置づけている。こうしたハッキング自身の仕事は、「人びとを作り上げる（Making up people）」プロジェクトから発展してきたものであり、私たちが私たち自身を作り上げるという問題に向き合うものである。ハッキングは、フーコーから引き継いだ「知、権力、倫理」という問題系を、「それを通じて、われわれが、自分自身を、知の対象として作り上げるところの心理」「それを通じて、われわれが、自分自身を、他者に対して働きかける主体として作り上げるところの権力」「それを通じて、われわれが、われわれ自身を、道徳的な行為者として作り上げるところの倫理」（Hacking 2002: 2=2012: 4）とパラフレーズしている。

このようなハッキング自身が提示する、私たち自身を作り上げるという問題系に沿って考えてみても、後に見るように『客観性』には、認識的徳と支え合って登場する科学的自己の議論が含まれており、ハッキング自身の歴史的存在論と、ダストンらの歴史的メタ認識論の違いは、むしろ力点の違い程度に考えてよいと思われる。

それに対しハッキングは、自身の哲学者としての仕事が、概念の分析を行うものであることを強調しつつ、次のように述べている。

「ダストンが描く出来事は、特定の社会的な文脈の中で生じたものである。だからその場

合でも知識の可能性の条件についての探求になっている。だがその場合でも、あくまで重要なのは、客観性という概念の用法が、その概念が、公の議論や何らかの組織において、今日用いられている仕方にかに影響を与えていることを見極めることである」(Hacking 2002: 17=2012: 39)

ハッキングが、科学に対する社会学的、歴史的なアプローチとの対比の上で、歴史的な存在論を哲学的なプロジェクトと呼ぶのは、それが概念の分析を行うものだからである。だが、すでに述べたように、概念の分析は社会学においても行われてきた⁴⁾。ハッキングも認めるように、概念は特定の環境の中で用いられるものである。だからこそ、社会学もその特定の環境において概念がどのように用いられているか明らかにすることができるし、EM研究はそうした解明を行ってきた。こうした蓄積をもとに、「人びとを作り上げる」プロジェクトのアイデアも継承しながら、「ループ効果 (looping effect)」(Hacking 1995=1998; 1996) のような現象に即して、実践における概念の使用を分析する方向性を示したのが『概念分析の社会学』というプロジェクトである⁵⁾。

そして、歴史研究である『客観性』においても、少なくともその一部は、概念の分析に関わるものだろう。そしてその分析は、ハッキングが述べるように、知識の可能性の条件にかかわるものである。

2.2. 「本性への忠誠」「機械的客観性」「訓練された判断」の位置

『客観性』の少なくともその一部は、概念の分析であり、それも実践における概念の分析でもあるだろう。D&G自身は、「概念を行為で、意味を実践で置き換えるならば、客観性というぼんやりとした観念についての焦点はくっきりしたものになる」(Daston & Galison 2007: 52=2021: 42) と述べている。『客観性』第1章「眼の認識論」では、こうした研究を支えているいくつかのアイデアがあらかじめ提示されている。「本性への忠誠」「機械的客観性」「訓練された判断」という3つの認識的徳が、『客観性』の中心的なアイデアである。

D&Gによれば、「一七世紀以来、科学アトラスは初心者を目を訓練し、熟練者の眼を較正するために利用されてきた」(集合的経験主義) という条件があり、その条件のもとで「機械的客観性」は、「一九世紀半ばに最初に登場し、数十年のあいだに科学の規範としてだけでなく、科学アトラスのための図像作成を含む一連の実践として確立した」のである。そうした(機械的)客観性は、「無意思への意思に基礎を置く科学的自己」と支え合って登場することになる。認識的徳は、文字通り徳であることに注意するなら、ハッキングの「人びとを作り上げる」プロジェクトとのつながりも見えやすい。

ここで提示された3つの認識的徳についての議論のなかでも、「新しい認識的徳が存在する

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

ようになったとき、必ずしも古いものが消え去るわけではない」（Daston & Galison 2007: 41=2021: 32）という指摘は、重要である。共存することは可能だが、「順序が、歴史が問題なのだ（Sequence matters - history matters）」（Daston & Galison 2007: 318=2021: 262）という指摘がなされている。少し敷衍して述べるならば、「機械的客観性」という認識的徳が成立した後で、その条件のもとでなければ、「訓練された判断」は論理的に可能にならない、ということなのだ。

新しい認識徳が存在するようになるとき、古い徳と対立してみえることがある。「本性への忠誠」と「機械的客観性」の理念の衝突は、ハッケル—ヒス論争において、客観性（科学）と主観性（芸術）の対立という枠組みの中でなされた（Daston & Galison 2007: 191-6=2021: 157-60）。いったん、このような対立する議論空間が作り上げられると、自然の形態の中に美を見出そうとするハッケルの試みは（新しい徳に照らして）エキセントリックなものに見えるようになる。このような意味で、論争という議論空間の中で、機械的客観性（科学的自己）と主観性（芸術的自己）が対立するものとして作り上げられる、という点は重要である。ここでは、どの概念とどの概念が結びつき、どの概念と対立するかが分析されている、という意味で、ハッキングのいうところの概念の分析がなされていると思う。その上で、次に新しい認識徳としての「訓練された判断」が登場するさいには、主観性は客観性を補完するものとして登場することになる。ここでは、概念の連関の変容をたどりなおす作業がなされていると考えられる。

新しい概念のもとで私たちの経験や行為のあり方、私たち自身のあり方そのものが変わる、というのがハッキングの「人びとを作り上げる」のテーマであった。論理的な可能性に関わるという意味で、認識的徳（と科学的自己）の変化も、可能性の条件の分析と言って良い。D&G自身が、「客観性」は遍在しているという主張をしているが、だからといって、その頻度や分布について何かが語られるわけではない。むしろ論理空間の変化という点でも、可能性の条件にかかわる記述として理解したほう良い。

他方で、それぞれの実際に図像を見る実践がどのように可能なのかは、個別事例の例証によって示されるよりほかない。ここでの個別事例は、私たちが行っている実践のあり方をあらためて思い起こす「リマインダ⁶⁾」としての位置を担っている。続く3節では、『客観性』において提示された個別の図像がどのように見えるかについて検討したい。

3. 「訓練された判断」と「見ること」のEM

3.1. 「訓練された判断」と「外在化された網膜像」

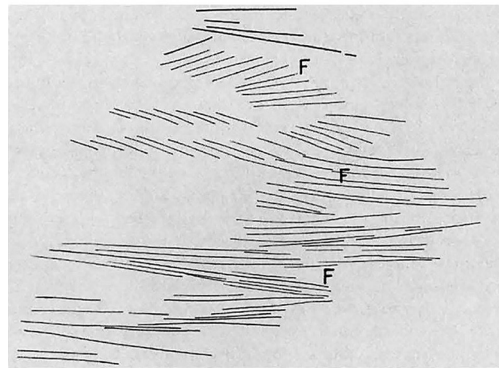
実際に『客観性』においては、多くの図像が引用され、その図像がそれぞれの認識的徳のもとでどのように見えるのか、つまり図像を見るという実践の中で視覚がいかに組織されているのか、例証していると思う。

D&Gによれば、認識的徳は、複数同時に存在しうるわけだが、『客観性』という書物の中心に位置するのは、やはり「(機械的)客観性」であろう。雲のアトラスからとった図7-3(口絵)には、「機械的客観性」というタイトルがつけられ、一連の説明文が付されている。その説明文においては、この図像について、撮影された状況(写真家、場所、日付と時間、空の方向)が付されていること、そうであっても雲の「属」全体を象徴することを意図したものであること、などが付記されている。興味深いのは、D&Gが、図7-3について、個物の図像だが、「本性への中性」という徳と支え合って見ることのできる「タイプ」でも、「訓練された判断」と支え合ってみることのできる「パターン」でもありえた、と述べていることである。図像がどのような認識的徳のもとで見られるかは、図像を用いる実践に依存している。

その上で、D&Gは、図7-6、7-7と比較せよと指示を出している。図7-6、7-7は、「観測者を訓練する」というタイトルがつけられた、パターンを見出す「訓練された判断」の図像である。図7-6は、図7-3と同様に撮影された状況が付された写真であり、その下の図7-7は、写真のスケールにあわせて描かれた図式的な図である(Daston & Galison 2007: 373=2021: 306)。

このように科学的な写真と図が併置されているのを見ると、EM研究者ならば、M. リンチが「外部化された網膜像」(Lynch 1988)という論文で行っていた科学実践における写真と図の分析を想起するはずだ。リンチは、このように写真と並置された図が、オリジナルの変換によって作成されていることを示している。

リンチの分析にならうならば、私たち読者もこの図7-6、7-7が並置されているのを見れば、オリジナルである写真に対して、一定の変換を行うことで、この図7-7が作成されていることに気づくはずだ。図7-7には、明らかに写真には映っているもの(たとえば明るさによるコントラストなど)が描き込まれておらず、フィルターをかけて不要なものを落とし、必要なものだけ描き込んでいることがわかる。



Cirrostratus filus, Internationales Meteorologisches Komitee, *Internationaler Atlas der Wolken und Himmelsansichten* (Paris: Office National Meteorologique, 1932). pl. 21. (Daston & Galison 2007: 373=2021: 306)

図7-6、図7-7 観測者を訓練する

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

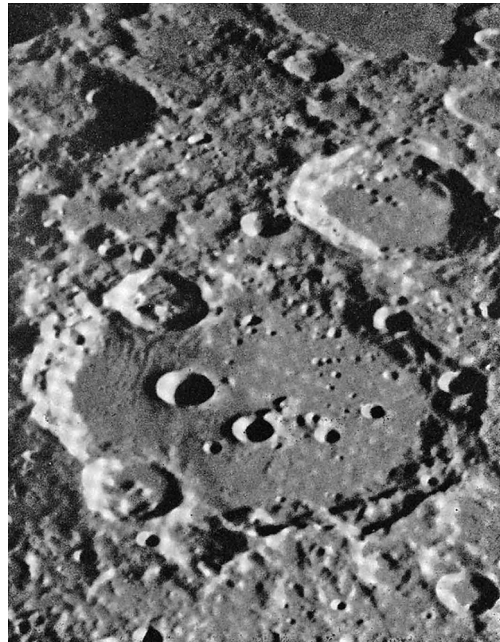
また写真だけでは判別が難しい「糸状の構造」を、線画の形式を用いることで、幅や濃度をともなった多様な現れを同種の線に均一化し、その線の輪郭を明確にすることによって、見るべきものへのインストラクションが与えられている（図には、写真にないFという記号が描き込まれている。これは何らかの概念を指し示すものだと思うのだが、筆者にはよくわからない）。

図7-6のように単独で見れば「機械的客観性」のもとでも見る事ができたかもしれない写真も、図7-7のように写真からのオリジナルの変換によって作成された図と並置されることで、「訓練された判断」という認識的徳のもとで見られるようになる。この並置された写真と図は、写真だけでは簡単には判別しがたい構造を見るためのインストラクションとして用いられており、このインストラクションによって、視覚が組織されなおしているのである。『客観性』の少なくともその一部が視覚的実践の研究でありうるのは、こうした個別の図像を見る実践における視覚の組織化を例証しているからだろう。

3.2. 「訓練された判断」と「プロフェッショナル・ヴィジョン」

図7-6に描き込まれた記号の意味が読者からはわかりにくい。この図像が「訓練された判断」という認識的徳のもとで理解されるべきものである、ということが例証できればよいのであれば、そこで具体的に何が、どう見ればよいのか、という視覚の組織化そのものの例証は、二次的な問題であるのかもしれない。

とくに機械的客観性にとっての「困難な課題」ということが強調されるとき、読者の理解が難しくなると思われる。事例として、ファーソフ『月面アトラス』（1961年）から引用された図6-9を見てみよう（Daston & Galison 2007: 351=2021: 289）。この図には、「熟達した眼で見た月」というタイトルが付され、写真が存在する場合でも「熟達した地質学者の眼」だけが「平行断層群」を検出できる、と説明がなされている。この「並行断層群」は、読者に見えることが期待されているのだろうか。それとも「熟達した地質学者」ではない読者には見えないことが期待されているのだろうか。何が、どのように見れば良いのか、という意味でのインストラクションとしての特徴は、や



V. A. Firsoff, *Moon Atlas* (London: Hutchinson, 1961), pl. 7.
(Daston & Galison 2007: 351=2021: 289)

図6-9 熟達した眼で見た月

やあいまいな位置に留められているように思う⁷⁾。

インストラクションとしての特徴があいまいだということは、何が、どのように見えればよいのかに加え、それがどのように成し遂げられるのか（／失敗するのか）といった点がわかりにくい、ということでもある。「訓練された判断」という認識的徳を想起させるために用いられた図像は、さまざまな科学の実践、あるいは科学教育の実践の中で用いられているはずである。『客観性』の目指すところの一部が、視覚的実践の研究であるならば、こうした図像が使用される実践について、もう少し研究関心を拡張することはできないだろうか⁸⁾。

一方で、「見ること」のEM研究には、C. グッドウィンの同名の論文に端を発する、いわゆる「プロフェッショナル・ヴィジョン」の研究がある。グッドウィンの研究は、考古学者の実践や法廷の実践において、専門家の視覚がどのように組織されているかを、明らかにしたもので、視覚の組織化へ向けてのインストラクションの分析を含んでいる⁹⁾。

ここには、視覚的実践の研究という観点からすれば、協働できるところもあるかもしれない。あるいは、誰かが、視覚的実践の研究として行うことのできる領域が、ここにあるのではないだろうか。少なくとも、図像のもとでの視覚的実践の詳細にさらなる関心を向けることは、概念の使用の分析にとって有益であるだろう。そして見てきたように、D&Gの仕事の少なくとも一部は、そうした方向に踏み出している。こうした方向性をもう一歩進めようとするなら、実践における概念の歴史研究の側から、EM研究を参照してもらえる余地があるだろう。

4. EM・ANT・『客観性』

4.1. 『ラボラトリー・ライフ』とEM

先にあげた M. リンチの「外部化された網膜像」は、Human Studies 誌の「科学的実践における表象 (Representation in Scientific Practice)」というタイトルの特集に掲載されたものである。その特集は、ラトゥールらの論文を加えて、リンチとウールガー編による同名の書物として出版されている¹⁰⁾。合評会のタイトル「実践としての科学的認識」に立ち戻るならば、もう一つの対象書、ラトゥールとウールガー（以下 L&W）による『ラボラトリー・ライフ』についても何かを述べるべきかもしれない。とはいえ、『ラボラトリー・ライフ』に関しては、古典的には M. リンチによるもの、本邦でも中村和生によるものなど、EM 陣営からはすでにいくつもコメントがなされているので、それらを振り返ることから出発したい。

なお、後にラトゥール自身が、ANT の入門書『社会的なものを組み直す』(Latour 2005=2019) の中で、ANT は半ばガーフィンケル (の EM)、半ばグレマス (の記号論) である、と述べているように (Latour 2005: 54=2019: 105)、あるいは「二人の英雄」としてガーフィンケルとタルドをあげているように (Latour 2005: 13=2019: 30)、ラトゥールに対しても、後の ANT の

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

発展に対しても、H. ガーフィンケルからの影響は強く、その意味で EM 研究との大きな共通点があるのは、むしろ当然のことと考えられる。

その上で ANT 以前に書かれた、『ラボラトリー・ライフ』に対してなされた批判には、経験的な研究の中で答えやすいものと、やや答えにくいものがある。たとえば、リンチは、L&W の記述が、実験室の作業の中で言明の形式に対する操作にのみ注目している点を批判している（Lynch 1993: 99=2012: 113-4）。確かに、言明の実際の使用は、より多様でありうるだろう。中村（2000）は、こうした批判から出発して、インスクリプション装置というアイデアがラトゥール自身の研究の中で展開してきた経緯をたどった上で、インスクリプションとなるものを実践の中で捉え直していくという仕方、EM 的に批判的に受容する方向性を示している¹¹⁾。こうした受容は生産的なものであるし、現在、あらためて読み直しても、『ラボラトリー・ライフ』の経験的記述の中には、その後の研究の可能性を開いていくアイデアがあったと思う。

他方で、経験的な研究の中でやや答えにくい批判は、方法論的ポリシーにかかわるものである。リンチの先の批判も、言明の事実への変換という考え方が、結局の所、「実在—表象」という二元論を保持し続けているのではないか、という方法論的な問いと結びついている¹²⁾。実際、『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』の中で、L&W の用語法が生み出しうる誤解については、繰り返し指摘されている。『ラボラトリー・ライフ』の例示が示しているのは、現象学的「構成（constitution）」により近いものであること。「構築されていない実在」という可能性を維持しないなら、「構築されている」という主張にあまり意味はないこと。そうした状況においては、安定的に受容されている事実は、「安定的なものにされた構築物」と言っても、「実在についての正確な言明」と言っても、経験的に示せる差はないこと、などなどがあげられる（Lynch 1993: 102=2012: 120-1）。これらの論点は 30 年前に指摘されている¹³⁾。

実際に、ラトゥール自身も、『社会的なものを組み直す』の中で、「科学的事実の社会的構築」という表現が「不用意な」ものであったことを認めている（Latour 2005=2019: 165）。ラトゥールによれば、「ある事実が構築される」とは、「さまざまな事物を動員することで、堅固で客観的な実在性が報告されることを示しているにすぎない」（Latour 2005: 91=2019: 171-2）とのことである。敷衍されたとおりのことであるならば、リンチの指摘とも整合するし、過剰な反実在論的な含意を引き出してくることもできなくなる。このような主張を文字通りに受け止めるならば、実験室研究において、事実の安定性は、科学的実在論とはさしあたり独立に研究できること、事実の安定性が研究できるなら、社会的構築という用語の方ではなくてよいこと、その上で、事実の安定性は、科学者自身にとっても問題であることなどの論点¹⁴⁾を認めてよいことになると思われる。そうであるならば、EM が貢献できる余地は大いにあるだろうし、協働できることがあるのではないだろうか。

4.2. ANT と EM

方法論的ポリシーにかかわって、リンチは、記号論の概念である「アクタン」と社会学の概念である「行為者」が混同されることはあまりないにもかかわらず、それ自体は中立的な出発点である記号論を採用したラトゥールの研究プログラムの中で、社会科学的な誤読と流用が行われる可能性があることも指摘している (Lynch 1993: 110=2012: 130)。

先述の「社会的構築」をめぐる議論もそうであったように、ラトゥール自身のその後の ANT の展開や、継承者たちの議論は、こうした用語法上の問題につけられた注釈としても読めるのではないだろうか。たとえば、『ブルーノ・ラトゥールの取説』で久保明教が、人間と非人間を対称的に扱うということは、両者の本質とされてきた志向性や法則性を二次的な要素として扱うことであり、事物のふるまいを人間の意図的行為と同等に扱えるということではないのだ (そして後者のように読むのは、むしろ人間の主体性に固執していることの裏返しなのだ)、と述べる時 (久保 2019: 145-7)、リンチが警告していた社会科学的な誤読と流用を戒めるもののように読めるだろう。

また、『ラボラトリー・ライフ』の解説論文で金信行 (2021) が、「インフラ理論」としての ANT について、現象を理論的外在的に説明するのではなく、現象の成立過程を経験的内在的に再構成するものとして提示するとき、方法論的ポリシーの中で誤読を伴いつつ使われてきた用語法の副作用を解毒しているように読める。金によれば、「アクター」や「ネットワーク」という概念は、先入見で軽視されてきた社会現象における諸要因とその関係を、新たに発見し記述するために、あえて意味内容を軽くした「空の箱」なのだということだ。

もちろん、ここでいう「インフラ」という考え方自体は、ラトゥール自身によって、述べられていることではある。近年の ANT の展開を追うことは、本稿に課せられた責務ではないが、EM との関係に関わる点についてのみ、簡単な覚書を残しておこう。ラトゥールは、ANT が用いることを好むのは、「インフラ言語」とでも呼ばれうるもののだとして、それは「アクターの語彙をはっきりと聞き取る」のにより良いやり方なのだとして述べている。その上で、「アクターの用いる概念が分析者の用いる概念よりも強い」(Latour 2005: 30=2019: 58) という表現が出てくる。こうした表現は、研究者の用いる概念よりも現象の側で用いられている概念を重視する、という点において、EM 由来のものである¹⁵⁾と考えられる。少なくとも同じ方向を向いていると捉えられるならば、ANT の作業の中にも、現象の側で用いられている概念を分析する作業が含まれているはずである。

こうした「インフラ言語」としての ANT の諸概念、とりわけ「アクター」という概念が、志向性のないものにエージェンシーを認めるためのものとして、非人間、物への着目を強め、多くの研究者を勧誘するのに成功したということはあるだろう。ただし、筆者自身の研究関心からは、アクターや非人間のような概念に使用上の難しさも感じられる。何よりも、人間がか

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

かわって営まれていることにおいても、「行為」と「活動」の水準は区別できる。一方で、「行為」という概念のありふれた用法として、(複数の記述ができるとしても)意図的行為としての記述を一つは与えることができ、したがって、行為者に何らかの意図を帰属できるような水準がある。他方で、個々の行為者に(あるいは行為者の意図に)還元することはできないが、参加者たちが時間の幅を分かち合って参加している「活動」の水準がある¹⁶⁾。この「活動」の水準に意図に還元できない言語、身体、物などが含まれるのは、むしろ自然なことのように思われる¹⁷⁾。こうした区別を見えにくくしてしまうならば、「インフラ言語」として、「誰がそして何が当の行為に参加しているのかという問い (the question of who and what participates in the action)」(Latour 2005: 136=2019: 72)¹⁸⁾ を検討することを、かえって難しくしないだろうか¹⁹⁾。

逆に言えば、ANTによる再構成の結果として、こうした記述可能な区別を捨象してしまうことにつながらないのであれば、いたずらに対立点を探す必要もないだろう。経験的な研究において、「空の箱」の中に何を見てどのように分析するかにかかっていると見えそうである。実際に『社会的なものを組み直す』の訳者でもある伊藤嘉高(2022)は、「アクター自身にしたがえ」という解法にそって、アクターの営みを丹念に記述する社会学として、EMをANTの理論的源泉として紹介している。その意味では、方法論的ポリシーと用語法を持つ問題点をいったん解除し、その上で、力点の違いをそれとして認めることができるのであれば、ことからの連関の解明を行う両者は、近いところにいるのだろう²⁰⁾。

EMにとってそうであるように、ANTにおいても、現象の側の事情に即して、ことからの連関をたどる作業が重要であるなら、その作業には、現象の側においてどのような概念が用いられることでことらが分節化されているのかをたどる作業を含むはずだ。そして、このようなみで実践における概念の連関をたどりなおす作業は、見てきたように『客観性』のような実践における概念の歴史研究にも含まれうるものだろう。このような水準での連携の可能性を示唆したところで、本書評論文を閉じたい²¹⁾。

注

- 1) 博士論文は、『心の文法』(前田 2008)として出版されている。医療実践におい「感覚」「感情」「記憶」といった心にかかわる概念がどのように用いられているか、そのあり方を分析したものである。たとえば、第Ⅲ部「記憶と想起」では、言語療法場面において、ある言葉が思い出せたり思い出せなかったりといったことが、どのように理解されているのか、相互行為分析を行うとともに、そもそも言語機能に対する着目(大脳機能局在説)がどのように可能になったのかを、あわせて示した。

近年の仕事としては、現象学的看護学者西村ユミとの共著として、『遺伝学の知識と病いの語り』(前田・西村 2018)『急性期病院のエスノグラフィー』(前田・西村 2020)がある。前者は、

遺伝性疾患に関わる新しい概念が、どのように経験や行為のあり方を変えてきたかについて論じたものである。後者は、(緩和ケアや急変対応といった)複数の看護師たちによる協働実践がどのようになされているか、明らかにしたものである。

- 2) その他、編者としてかかわった『ワードマップ エスノメソドロジー』(前田ほか編 2007)には、中村和生による科学のEM研究にかかわる「実験する」「比較する／測定する」という項目がある。また、筒井淳也との共著『社会学入門』(筒井・前田 2017)には、「科学・学問」の章があり、そこでは『リヴァイアサンと空気ポンプ』(Shapin & Schaffer 1985=2016)『ラボラトリー・ライフ』(Latour & Woolgar 1986=2021)等の紹介を行っている。
- 3) EM研究においては、このように現象が時間的・空間的に組織されていることに注意を向けるために「局所的(local)」という概念を用いることがある。この概念は、そのように組織された意味連関を切り離さずにたどることを促すために用いられているのであり、グローバルのような概念と対になって時間的な短さや空間的な狭さを示す含意はない。詳しくは、『ワードマップ エスノメソドロジー』のFAQ(岡田光弘執筆項目)(前田ほか 2007: 259)参照。
- 4) そもそもハッキングに、注目すべき概念として「児童虐待」を示唆したのは、EMにも近いところで仕事をしていたカナダのフェミニスト社会学者D.E. スミスなのだから、むしろ当然のことと言えよう。このエピソードが紹介されている論文「フーコーとゴフマンの間」(Hacking 2004)は、ハッキングが用いた「ループ効果」という言葉について、すでに社会学者E. ゴフマンが使っていたものである、というリンチ(Lynch 2001)による指摘に対する応答になっている。ハッキングは、ゴフマンをフーコーと並べた上で「一人の人間の可能性のうち、あるものがまさに存在するようになり、他の可能性が排除されるのはいかにしてかという問い」を扱っているのだと述べている(Hacking 2004: 288)。
- 5) ループ効果は、人びとを記述する概念と、その概念によって記述される人びととの間で相互作用がおこることに目を向けるための概念である。その相互作用は、人々を記述したり分類したりする新しい方法や理論のもとで、記述された人々の経験や行為の理解の仕方を変化させ、さらにその変化が分類や理論の改訂を要求するようになる、といった過程で進んでいく。詳細は、酒井ほか編(2008)の「ナビゲーション」等を参照してほしい。
- 6) 事例は、私たちが行っている実践のあり方をあらためて思い起こすためのもの(リマインダ)であるという考え方は、『ワードマップ エスノメソドロジー』のFAQ(小宮友根執筆項目)(前田ほか 2007: 262)で紹介されている。また、この考え方に沿って、前田・西村(2018)の終章においては、固有の事例が一般的に使用可能な方法を組み合わせることによって成り立っていることを強調した。歴史学者松沢祐作は、これらの論点を参照しつつ、「個々の研究対象の活動およびそれにかかわって産出される個々の史料は、それ自体が一般的なものを含んでいる」(松沢 2022: 33)と主張している。
- 7) 訳書においては口絵のみにとりあげられている、図6-8「月を判断する」は、筆者が確認した原書では、口絵だけでなく、図6-7と見開きで並置されている(Daston & Galison 2007: 350-1=2021)。図6-8には、ファースフにとって、光の条件によって「問題含みのもの」となってしまう写真よりも、「解釈された線画の方が」「忠実な表象」であった、という主旨の説明文が付されている。両方を並べてみても、図7-6、7-7のようなインストラクションとしてのわかりやすさはない。
- 8) こうした方向性は、科学史家としてのD&Gの仕事の外にあるのかもしれない。そうだとしても、「訓練」がどのように成功(／失敗)しているのかについては、何らかの仕方でもう少し記

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

述があってもよかったように思う。訳者の一人岡澤康浩は、『客観性』の書評の中で「科学アトラスが実際にどのように眼の訓練に使われたのかが不明瞭であり、それゆえ異なる場所や時間にいる観察者たちが共に同じように見ることがどのように可能になったのかがよくわからないという点」（岡澤 2021: 13）を問題点としてあげ、ありえた研究の方向性を示している。

- 9) 医療福祉現場の研究においても、海老田大五郎による柔道整復師の「プロフェッショナル・ヴィジョン」に関するものがある。海老田（2018）では、柔道整復師が、超音波画像観察装置を使用して切り取った静止画の見方を、患者に教える実践が扱われている。また、筆者による「見ること」のEM研究としては、前田（2021, 2023a）を参照。
- 10) この特集には、リンチとウールガーの共著によるイントロダクションに加え、J. ローとリンチの共著論文も掲載されている。なお、2014年に編者や著者を加えて発刊された *Representation in Scientific Practice Revisited* (Coopmans et. al. 2014) には、ダストン自身の文章も収録されている。本特集の河村論文（河村 2024）を参照してほしい。
- 11) この方向性は、『ワードマップ 状況と活動の心理学』（茂呂ほか編 2012）に収録された中村執筆による「インスクリプション」という項目にまとめられている。
- 12) リンチ自身が述べるように、実在とその表象（とその媒介）というのは、ワイトゲンシュタインの規則に従うことをめぐる議論の懐疑論的解決の構成方法と同じであり、これに対する批判は、リンチ（Lynch1993=2012）の第5章「ワイトゲンシュタイン、ルール、認識論のトピック」で展開されている。
- 13) 筆者自身も、『社会学入門』（前田・筒井 2017）において『ラボラトリー・ライフ』を紹介したさいには、そこから反実在論的な含意を引き出さないように、また、実在論-反実在論といった哲学的な議論にとらわれずに、経験的な研究プログラムとして理解するように推奨したことがある。
- 14) これらの論点は、2012年の応用哲学会のシンポジウム「哲学と社会学のコラボレーションのために（Ⅱ）」の準備のために、ともに報告者であった科学哲学者二瓶真理子さん、科学社会学者中村和生さんと、ハッキング、ラトウール、EMの関係について議論していた際に、検討したものである。私自身は、実験室の研究をしていないため、シンポジウムでは、急性期病院の緩和ケアの実践をとりあげ、そこで痛みがどのように測定されているか、について報告した。「痛みスケール」を用いてなされる測定の実践の分析は、前田・西村（2010）が初出で、前田・西村（2020）にも収録されている。当日の議論内容に関わる文献として二瓶（2010）、中村（2000）も参照。
- 15) こうした問題系は、社会科学方法論の分野では、古典的な問である。ガーフィンケル以上に、この問題を先鋭的に定式化したものとして、H. サックスの「社会学的記述」（Sacks 1963=2013）がある。詳細は、前田（2023c）を参照してほしい。
- 16) 「行為」や「活動」については、『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』（山崎ほか編 2023）に掲載された「ワイトゲンシュタインと日常言語学派」（前田 2023b）において、L. ウイトゲンシュタインやG.E.M. アンスコム、J.L. オースティン、G. ライルらに言及しつつ論じているので、そちらを参照して欲しい。
- 17) EM研究の側には、こうした論点について、ワイトゲンシュタインや日常言語学派の哲学、M. メルロ=ポンティ、M. ハイデッガーらの現象学に触発されつつ、それらから得た着想を経験的研究のプログラムの中に落とし込んできた経緯がある。経験的な資料を用いるEM研究者が、哲学を学ぶことの第一の意義は、実際の区別を覆い隠してしまう概念上の混乱に惑わされずに、

現象を理解するための展望をひらく助けとすることにある（前田 2011, 2020）。

- 18) 本稿では、訳書のある書籍からの直接引用については、原則として訳書の表現を用いたが、この箇所のように、表現を改めた箇所があることをお断りしておく。
- 19) ラトゥールによる ANT の定式化と EM への言及には、そのような疑念につながる箇所がある。たとえば、ラトゥールは、アカウント（報告）への着目を強調する箇所で、アカウントビリティという EM の概念を記号論と交配させる、と述べている（Latour 2005: 122=2019: 233）。また、「ネットワークをたどる」ことを強調する箇所で、「指標としてのネットワーク」は、EM 研究の「固有の妥当性」に相当すると述べた上で、「報告の概念が、テキストによる報告という概念によって肉付けられていることが条件」だと述べている（Latour 2005: 129=2019: 245）。書かれたテキストに注目を向けたいのは理解できるが、EM 研究の側からすれば、なにごとかが報告可能であり、それと見てわかり、語るができる、ということは、書かれたテキストに限ったことではない。むしろ、テキストを書く／読むことは、EM 研究が扱ってきた「方法」的实践の一つに含まれるのであり、そのようなものとして、テキストの EM 研究はなされている。テキストの EM 研究としては、Watson (2009)、岡澤 (2022)、Kawamura & Okazawa (2023) 等を参照してほしい。
- なお、ガーフィンケルの「アカウントビリティ (accountability)」(Garfinkel 1967) という概念については、「現象学とエスノメソドロジー」(前田 2020) の中で、テキストをあけて検討しているので、そちらを参照してほしい。本稿での覚え書きとあわせてみれば、EM を介して、現象学と ANT を、人間と非人間の対立のような軸で読むのではなく、現象の側の連関をたどる方法の水準で検討する方向性が見えてくると思う。
- 20) たとえば、ラトゥール自身が、アクターネットワークをたどりなおす事例をあけるさいに、C. グッドウィンや L. サッチマンの研究 (Goodwin & Goodwin 1996; Suchman 1987=1999) に言及している点は、注目に値する (Latour 2005: 72, 179=2019: 137, 345)。ラトゥールが引用した「協調のセンター (centers of coordination)」(Suchman 1997) というサッチマンのアイデア (Latour 2005: 181=2019: 349) は、拙著『急性期病院のエスノグラフィー』(前田・西村 2020) の病院の研究にも活かされている。そこで描かれた緩和ケアの実践と、A. モル『多としての身体』(Mol 2002=2016) における動脈硬化の実行を、また『遺伝学の知識と病いの語り』(前田・西村 2018) における遺伝性疾患と、『ケアのロジック』(Mol 2008=2020) における糖尿病を比較してみれば、前者に ANT への、後者に EM への言及はほとんどないにもかかわらず、実践の研究としての近さを見ることもできるだろう。
- 21) 岡澤 (2023) は、実践とそれを可能にする物質的環境や概念的布置とを切り離さずに分析する「生態学的分析」のアイデアのもとに、哲学的社会学者・人類学者と哲学的歴史家との連携の可能性を示唆している (岡澤 2023: 41)。あわせて参照してほしい。

文 献

- Coopmans, C. J. Vertesi, M. Lynch & S. Woolgar, 2014, *Representation in Scientific Practice Revisited*, MIT Press.
- Daston, L. & P. Galison, 2007, *Objectivity*, Zone Books. (=2021 瀬戸口明久ほか訳『客観性』名古屋大学出版会.)

- 海老田大五朗, 2018, 『柔道整復の社会学的記述』 勁草書房.
- Garfinkel, H. 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice Hall.
- Goodwin, C., 1994, Professional Vision, *American Anthropologist*, 96(3): 605-33. (=2010 北村弥生・北村隆憲訳「プロフェッショナル・ヴィジョン——専門職に宿るものの見方」『共立女子大学文学部紀要』56: 35-80.)
- Goodwin, C. & M. H. Goodwin, 1996, Seeing as Situated Activity: Formulating Planes, In Y. Engeström & D. Middleton, eds. *Cognition and Communication at Work*, Cambridge University Press, 61-95.
- Hacking, I., 1995, *Rewriting the Soul: Multiple Personality and The Sciences of Memory*, Princeton University Press. (=1998 北沢格訳『記憶を書きかえる——多重人格と心のメカニズム』早川書房.)
- Hacking, I., 1996, The Looping Effects of Human Kinds, In D. Sperber, D. Premack, and A. J. Premack eds., *Causal Cognition*, Princeton University Press, 351-83.
- Hacking, I., 2002, *Historical Ontology*, Harvard University Press. (=2012 出口康夫ほか訳『知の歴史学』岩波書店.)
- Hacking, I., 2004, Between Michel Foucault and Erving Goffman: Between Discourse in the Abstract and Face-to-face Interaction, *Economy and Society*, 33(3): 277-302.
- 伊藤嘉高, 2022, 「ANT の基本概念をたどる——記号論という『工具箱』を調査に持参する」栗原亘編『アクターネットワーク理論入門——「モノ」であふれる世界の記述法』ナカニシヤ出版, 43-69.
- 河村賢, 2024, 「普段着姿の認識論と存在論に立ち戻る」『人文學報』122: 25-44.
- Kawamura, K. & R. Okazawa, 2023, Reading What is Not There: Ethnomethodological Analysis of the Membership Category, Action, and Reason in Novels and Short Stories, *Human Studies*, 46(1): 117-35.
- 金信行, 2021, 「経験的研究においてブリュノ・ラトゥールの理論はいかなる意義を持つのか——ラトゥールが行った経験的研究の比較検討に基づくアクターネットワーク理論の学説史/理論研究」立石裕二・森下翔監訳『ラボラトリー・ライフ——科学的事実の構築』ナカニシヤ出版, 289-306.
- 久保明教, 2019, 『ブルーノ・ラトゥールの取説——アクターネットワーク論から存在様態探求へ』月曜社.
- Latour, B., 2005, *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*, Oxford University Press. (=2019 伊藤嘉高訳『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局.)
- Latour, B. & S. Woolgar, 1986, *Laboratory Life: The Construction of Scientific Facts*, Second Edition, Princeton University Press. (=2021 立石裕二・森下翔監訳『ラボラトリー・ライフ——科学的事実の構築』ナカニシヤ出版.)
- Lynch, M., 1988, The Externalized Retina: Selection and Mathematization in the Visual Documentation of Objects in the Life Sciences, *Human Studies*, 11: 201-34.
- Lynch, M., 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press. (=2012 水川喜文・中村和生監訳『エスノメソドロロジーと科学実践の社会学』勁草書房.)
- Lynch, M., 2001, The Contingencies of Social Construction, *Economy and Society*, 30(2): 240-55.

- Lynch, M. & S. Woolgar, eds., 1990, *Representation in Scientific Practice*, MIT Press.
- 前田泰樹, 2008, 『心の文法——医療実践の社会学』新曜社.
- 前田泰樹, 2011, 『『痛み』の文法——ワイトゲンシュタインとエスノメソドロジー』『道の手帖 ウイトゲンシュタイン』河出書房新社, 141-6.
- 前田泰樹, 2020, 「現象学とエスノメソドロジー——経験の一人称性と社会性」『フッサール研究』17: 87-106.
- 前田泰樹, 2021, 「協働実践における知覚と行為——救命救急センター病棟のワークの研究」『現象学と社会科学』4: 5-24.
- 前田泰樹, 2023a, 「インターホンに対応する——救命救急センター病棟における知覚の編成」小宮友根・黒嶋智美編『実践の論理を描く——相互行為のなかの知識・身体・こころ』勁草書房, 220-37.
- 前田泰樹, 2023b, 「ワイトゲンシュタインと日常言語学派」山崎敬一ほか編『エスノメソドロジー・会話分析ハンドブック』新曜社, 17-27.
- 前田泰樹, 2023c, 「人間の科学の諸概念に対する社会的概念分析」北田暁大・筒井淳也編『岩波講座社会学 第1巻 理論・方法』岩波書店, 213-32.
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編, 2007, 『ワードマップ エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社.
- 前田泰樹・西村ユミ, 2010, 「『メンバーの測定装置』としての『痛みスケール』——急性期看護場面のワークの研究」『東海大学総合教育センター紀要』30: 41-58.
- 前田泰樹・西村ユミ, 2018, 『遺伝学の知識と病いの語り——遺伝性疾患をこえて生きる』ナカニシヤ出版.
- 前田泰樹・西村ユミ, 2020, 『急性期病院のエスノグラフィー——協働実践としての看護』新曜社.
- 松沢裕作, 2022, 『日本近代村落の起源』岩波書店.
- Mol, A., 2002, *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*, Duke University Press. (=2016 浜田明範・田口陽子訳『多としての身体——医療実践における存在論』水声社.)
- Mol, A., 2008, *The Logic of Care: Health and the Problem of Patient Choice*, Routledge. (=2020 田口陽子・浜田明範訳『ケアのロジック——選択は患者のためになるか』水声社.)
- 茂呂雄二・有元典文・青山征彦・伊藤崇・香川秀太・岡部大介編, 2012, 『ワードマップ 状況と活動の心理学——コンセプト・方法・実践』新曜社
- 中村和生, 2000, 「テクノサイエンスとエスノメソドロジーの接点——インスクリプション」『現代社会理論研究』10: 267-80.
- 二瓶真理子, 2010, 「科学的事実につくられているのか?——『実験室科学』における『社会的構成』と『実物的安定性』」『文化』73(3): 361-43.
- 岡沢亮, 2022, 「エスノメソドロジーとテキストデータ」『社会学評論』72(4): 540-56.
- 岡澤康浩, 2021, 「[書評]ロレイン・ダストン, ピーター・ギャリソン『客観性』」『Tokyo Academic Review of Books』vol. 29.
- 岡澤康浩, 2023, 「範例と二人の哲学者——推論する動物たちの生態史のために」『思想』1194: 33-47.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編, 2008, 『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版.
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編, 2016, 『概念分析の社会学2——実践の社

実践における概念を研究するとはどのようなことか？（前田）

会的論理』ナカニシヤ出版.

Sacks, H., 1963, Sociological Description, *Berkeley Journal of Sociology*, 8: 1-16. (=2013, 南保輔・海老田大五朗訳「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』24: 77-92.

Shapin, S. & S. Schaffer, 1985, *Leviathan and the Air-pump: Hobbes, Boyle, and the Experimental Life*, Princeton University Press. (=2016 吉本秀之監訳『リヴァイアサンと空気ポンプ』名古屋大学学術出版会.)

Suchman, L. A., 1987, *Plans and Situated Actions: The Problem of Human-Machine Communication*, Cambridge University Press. (=1999, 上野直樹・水川喜文・鈴木栄幸訳『プランと状況的行為——人間—機械コミュニケーションの可能性』産業図書.

Suchman, L., 1997, Centers of Coordination: a Case and Some Themes, In L. Resnick, R. Säljö, C. Pontecorvo, & B. Burge, eds., *Discourse, Tools, and Reasoning: Essays on Situated Cognition*, Springer, 41-62.

筒井淳也・前田泰樹, 2017, 『社会学入門——社会とのかかわり方』有斐閣.

Watson, R., 2009, *Analysing Practical and Professional Texts: A Naturalistic Approach*, Farnham: Ashgate.